NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK II — PUDU ALPHA

第 3 章　第三の署名

The Third Signature

最初に仲介人が差し出したのは、二人のどちらも行った覚えのない取引の領収書だった。

ナディラが旧河川高架の下で紙コップの茶を買っているとき、その領収書が手首のディスプレイに届いた。文面は三十年前に廃れた商業マレー語で書かれ、時刻は時間ではなく潮の満ち引きで表されている。請求額は、飲用適格と認証された水、十一滴。債務者の欄には、分類を拒否する相続上の権利を備えた「物体」と記されていた。

ナディラはロイを見た。

「招待状か、ずいぶん高くつく侮辱か、どちらかね」

「誰が送った」

「誰でもない。そこが肝心なの」

茶店の上では、かつて列車を通した高架を、いまは配管が走っていた。音響被覆の下で六本の水流が並走し、それぞれ所有者が異なっている。ロイには継ぎ目ごとの圧力変化が聞こえた。都市の法制度は循環器系に変貌したのだ。頭上を流れるのは所有権で、足元では契約が残した過失が売買されている。

彼自身の循環は、それほど潤沢ではなかった。夜明け以来、体内の未知の媒体はさらに僅かに減っていた。どれだけ失ったかは判断できない。ただ、かつて無尽蔵に思えた内側の余裕に、いまは輪郭がある。これを疲労とは呼ばないようになっていた。疲労なら眠れば消える。

「十一滴とある」

「古い対抗措置よ。本物の請求なら銀行に入らず支払える。最小の支払いを尊重する商人はまだいる。小さな支払いを守れることが、大きな支払いを守れる証拠になるから」

「払わなければ？」

「向こうが客を探しているのか、逃亡者を探しているのか、わかるでしょうね」

ナディラは二杯目を買い、ひび割れた柱の脇に置いた。そして公共浄水メーターの金属製の縁へ、正確に十一滴を落とした。感温変色フィルムの細い帯が黒くなり、行き先を印字した。

《下流堤防／番号のない門／第三署名必須》

フィルムは雨の中で溶けた。

＊　＊　＊

古い河川の姿は、もはや見えなかった。倉庫、仲裁所、住宅の増築部分が、何段階にもわたって川を覆い隠している。世紀が変わるたび、その前の世紀の負債の上にコンクリートが流し込まれた。基礎と基礎のあいだに残った細い隙間では、黒い水が流れ続ける。止まる権利を奪われたもののように。

ナディラはシャッターの閉まった両替所の廊下へロイを導いた。塗装された矢印が礼拝室を指し、別の矢印は認可身体専用エレベーターを指している。どちらにも、その先の通路の記載

はない。緑の雨合羽を着た女が、ランプの光の下で機械式計算機を修理していた。二人が通っても顔を上げなかった。

「監視されているのか」とロイ。

「もちろん。問題は、誰に記憶する許可があるかよ」

仲介人の事務所は市営ポンプ場の抜け殻にあった。真鍮の圧力計が壁を埋め尽くす。配管に接続されたものもあれば、どんな当局にもすでに認められない概念を測るらしいものもある。契約に立ち会った証人の人数。異議申し立ての継続時間。争われている死の確率。

中央に一人の男が座っていた。肌には高級な置換組織特有の、艶のない柔らかさがある。対照的に、手は古く、改造されていない。爪は短く整えられ、指の関節の下に細い青い静脈が浮いていた。徽章のない灰色の襟を着けている。

「払ったな」と男。「いいことだ。招待されたのだから入場は無料だと思う人間は多い」

ナディラは立ったままだった。

「ハリス・サマド？」

「その名前を使ったことはある。サービスを買いに来たのか、人物を調べに来たのか」

「保管権の移転。おそらくクチン」

初めて男はロイを見た。視線が手首と首に留まる。コートがほぼすべてを隠している場所だ。その一瞬で十分だった。ロイの身体はその視線について十二通りの解釈を提示し、ハリスが二脚の椅子を示しただけで、そのすべてを下方修正した。

「ここにスキャン装置はない」とハリス。「座ってもいい。立っていれば所有されにくいと思うなら、そのままでもいいが」

ロイは座った。

ハリスは愉快そうではない笑みを浮かべた。

「信頼か、椅子の効率的使用か。後者だと思っておこう」

＊　＊　＊

仲介人は端末を開かなかった。素材の違う三枚のカードを卓上に滑らせた。一枚目は清潔な無地のポリマー。二枚目は縁のも

ろくなった圧縮綿紙。三枚目は角の近くに穴を開けた、鈍い金属の細長い板だった。

「ものを移す方法は三つ」と男は言った。「第一はアクセス権。第二は所有権。第三は保管責任。デジタル法廷はそれらを一つにまとめた。会計が美しくなるからな。河川法廷では分けたままだ。まとめると何が起きるか、人々は身をもって知ったからだ」

「タイレルの治具はどれで移されたの？」とナディラ。

ハリスは答えず、ポリマーのカードに触れた。

「アクセス権は失効する。今日扉を開ける手段を持っていても、明日は失うことがある。所有権は扉を開けられるかどうかを気にしない。保管責任とは、その扉の向こうにあるものを所有していなくても、扉に責任を持つことだ」

ロイは金属片を持ち上げた。縁は幾人もの手で滑らかに磨耗していた。

「人間なら？」

「だからこそ分類を分けている」

「違う」とロイ。「分離を要求する条項が書かれた理由はわかる。実際に守られたかどうかは知らない」

ハリスの目がナディラへ動いた。

「水利裁判所は教えすぎたようだな」

「教えたのは紙に書かれたことだけ」と彼女。「紙は自白じゃない」

「請求書もそうだ」

男は机の下から折り畳み式の台帳を取り出した。ページにはインクではなく機械の圧痕が刻まれている。紙を傷つけるほど強く文字を押しつけた者がいたのだ。ハリスが開いたページには、英数字が並んでいた。

《NAR-41／移送受領確認／第三者エスクロー》

その下に日付があり、「受領人」と「証人」の二つの欄がある。受領人は空白。証人には短い符号《H.S./SARC-3》。二人目の証人欄は刃物で切り抜かれていた。

「クチンを経由した」とハリス。「そこまでは事実だ。この紙の経路は、何が移されたかを記述せずに、保管責任が移ったことだけを証明するために作られている」

「治具は二セットか」とロイ。

「答えを急ぎすぎだ。NAR-41 は対応する一対を記載している。しかし一対の装置が輸送のため分けられることは珍しくない。何より、紙にも封印にも、その二つが移送を生き延びた証明にはならない」

「誰が移転を承認した？」

「それが危険な問いだ。大半の人間は装置の在りかを訊く。装置が何を解除するか訊く者は少ない。もう一度始める権利を移すことが誰に許されたか——そこを訊く者はほとんどいない」

ロイは金属カードを卓上へ戻した。

「誰だ」

ハリスは台帳を閉じた。

「第三の署名が必要になる」

＊　＊　＊

岡京で、川村室長は青い機密紙一枚に印刷された報告を読んでいた。電子的な発信元の刻印はない。紙は三つの物理的な机を渡ってきた。どの机にも人間の職員がおり、彼らは配達人ほども報告の内容を知らなかった。

省の公開システムは、プドゥの調査が偽造水利権に関するものだと信じている。非公開の調査系だけが、休眠中のタイレル旧式指定を用いる請求者が法廷の記録庫にアクセスしたと知っていた。二つの系統の情報が交わることは想定されていない。共有している事実は一つだけ――ある建物が、適正な水利検査装備なしに調査されたこと。

「こちらの部隊は視認された」と川村。

「旧管轄の仕組みを理解している者にだけです」と副管理官の榎本が答えた。

「見えたか見えないかは二値だ」

「仲介人街区には受動的な経路があります。中央照会は実施していません」

川村は報告書を机に置いた。隣室では省所属のヒューマノイドが着色ガラスの奥で命令を待っている。直立姿勢を保つための微細な運動補正以外、動くものはなかった。耐用年数は二十二年、定期的な再認証が条件だ。寿命六年への統一規定案が施行されれば、この数字はコンプライアンス上の欠陥になる。

機械自身はそれを知っているのか。言語処理装置なら、どの省の法務官より雄弁に論じることもできる。だから川村は訊かなかった。

「第三の署名を認めた人物を特定しろ」

「どの管轄権で？」

「我々の管轄ではない。まだな」

榎本はためらった。

「現存する相続人に属する身元情報なら、遺産登録簿は省の検索から遮断されています」

「なら検索するな」

「何を調べますか」

「不在そのものだ。空欄を維持するために行われた支払いを探せ」

榎本は紙を持って退出した。川村はガラスの向こうのヒューマノイドを見た。寿命が帳簿上の一項目になっている。自分の寿命でない限り、文明は驚くほど簡単にその考えに慣れるものだ。

私用の端末には、閲覧禁止の研究索引が一件だけ表示されていた。《R／WATER／CONTINUITY》。その索引は古すぎて、省の新たな意味解析監査を逃れていた。川村は開かなかった。絶対に避けるべきことは、国家の推論エンジンに、自分が何を問うているか教えることだった。

＊　＊　＊

「第三の署名って何？」ナディラが訊いた。

「送信者も受信者も、対象物をすり替えていないと保証する者だ」とハリス。「登記官の場合も、保管人の場合もある。ときには、誠実であり続けるだけの利害を持つ証人にすぎない」

「今回は？」

「不在だ。決済が成立する前に、あらゆる電子複製から名前が削られた」

「政府が？」

「削除を発明したのが政府だとでも思っているのか」

ロイはハリスの改造されていない両手を観察した。この男は何十年もの身体交換の時代を通して、手だけを残した。身体に関する決定には、商業的な理由のつかないものがある。

「第三の署名者がいるなら、原本を探せばいい」

「原本が証明するのは署名者だけではないからだ。装置をどんな条件で保管するかまで証明してしまう。誰かが多額の金を投じて、記録を保存しながら索引化させないようにした」

「あなたが持っている」とロイ。

「請求する手段を持っている。それは違うことだ」

「どこだ」

「正式な河川街区の外にあるエスクローの聖所。商業統合以前の保守記録庫だ。配送品は製造番号でなく、質量、水位変化、証人によって記録される」

ナディラは眉をひそめた。

「STEPWELL？」

ハリスの顔がわずかに変わった。

「知っているのか」

「誰も知らない。知っていると言う人はいるけど」

「それなら、昼間に近づくことが意図の公表に等しいのはわかるな」

ロイの関心はもうカードになかった。ナディラの端末にあった古い Memory Stick の画像を考えていた。取るに足らないプラスチックの小片が、彼の再起動の可能性を握っている。身体がどれほど強力になろうと、キャッシュが傷つけば沈黙した機構へ戻り、誰かが握る鍵を待つことになる。依存すること自体が嫌なのではない。その条件を知らないことが嫌だった。

「あとどれくらい時間が残っているのか、知りたい」とロイ。

ハリスは彼を見つめ、しばらく商人の顔を失った。

「我々は時間を売らない」と言った。「誰が誰にどれだけの時間を約束したか、記録するだけだ」

＊　＊　＊

ポンプ場の配管を伝って音が来た。低い三度の打撃、そして沈黙。ハリスは天井へ振り向いた。

ナディラはすでに裏通路へ動いていた。

「検査？」

「違う」とハリス。「訂正だ」

扉に最も近い真鍮の計器が、圧力に変化もないのに上昇した。ロイは針を追い、次に古い電磁リレーの微かな振動を聞いた。知っている命令信号ではない。公的な電力網につながっていない複数の装置へ、同時に触れていた。誰かが保守ネットワークを使い、まだ応答する機器を探っている。

ロイの身体は馴染みの選択肢を提示した。発信源を排除し、通路を制圧し、追手より速く走る。強襲の成功見込みは高かった。未知の媒体の消費予測は、そうではなかった。

彼は座ったままだった。

「ネットワークを使わない出口は？」

ハリスが眉を上げた。

「見かけ以上に高くつく客だな」

「答えろ」

「計量室の奥だ。錘に水を入れた昇降機がある。電気なしで動くが、遅い」

「遅くてもいい」

二度目の金属音が管を走った。ナディラが卓へ戻り綿紙のカードを取ると、ハリスは彼女の手首をつかんだ。

「そっちではない。それは所有権を確立する。持って行かないほうがいい」

代わりに金属製の保管トークンを渡した。

「STEPWELL で見せろ。向こうが認識すれば、消された証人について訊ける。認識しなかったら立ち去れ。議論はするな」

「誰が認識するの？」

「私は名を知らない」

ロイは立ち上がった。リレーの振動が強まる。建物の外で一台の車が、ほとんどタイヤ音を立てず止まった。反対側の道から二台目が近づくのが聞こえる。裏道まで予測されている。

「包囲された」とナディラ。

「都市が平面ならな」

ロイは計量室へ進んだ。秤の下の点検坑に古い水圧式の昇降機があった。陶製の車輪が水門を制御している。歯はすり減っていたが無傷だった。ロイは車輪をゆっくり回し、錘の槽へ水を送り込んだ。頭上では保守ドローンが屋根を横切り、停止した。古い断熱層越しに三人の熱輪郭を判別しようとしている。

輝く内部の幾何学が、屋根へ跳び上がってドローンを無力化せよと提案した。ロイは却下した。機械は代替できる。彼の液体はできない。

昇降機は沈み始めた。

＊　＊　＊

二人は涼しい空気と朽ちかけた紙の匂いに満ちた空間へ降りた。格子の向こうに都市の埋もれた工学構造が見える。コンク

リートの地下室、廃れたケーブル受け、どの省の地図にも載らない狭い黒い水路。仲介人は上に残った。同行するとは言わず、二人も求めなかった。

ナディラは手首の光に保管トークンをかざした。表面には不自然な角度で接する二本の弧が刻まれている。イドリスが旧法廷の記録で、さらにロイの手首インターフェースの浮き彫りで見つけたのと同じ印だった。

「彼がこれを渡すって知っていたのね」

「知らなかった」

「でも印はわかった」

「彼がその名を口にするのを恐れたことはわかった」

昇降機は小さな衝撃とともに底へ着いた。ロイは動く前に待った。彼の身体は、動きが起こる前に動きを告げる癖がある。予測が身体的能力になったかのように。この世代の身体を造った技術者たちは、その速度を親切だと思ったのだろうか。

格子の先は使われなくなったポンプ導管だった。奥では市の投影装置が、荒いコンクリート壁に広告を映している。いくつも

の階から漏れた光が一つの映像になっていた。透明な水のグラス、女の手、結露にほとんど消された一行の文字。

《未来は、浄化できる資源です》

その下の社章は見えない。ロイは一瞬女の手を見つめ、視線を外した。広告とは、メッセージと誤認されるよう設計されたものだ。彼にはまだ理解できないメッセージがすでに十分あった。

二人は投影が背後に消えるまで都市の下を歩いた。頭上の塔のあいだを礼拝への呼びかけが渡り、その下で機械式ポンプが四拍子の一定のリズムを返した。ナディラが先を行く。トークンは彼女の掌で冷たかった。

「STEPWELL で何が起きる」とロイ。

「保管の連鎖を誰が生かし続けたか、わかる」

「政府のために守っていたなら？」

「それなら、政府が自分の機械に何を知られたくないのかがわかる」

ロイは黙った。それは彼の第一の問いではない。だが残りの問いを発するまで生き延びるために、唯一の問いになるかもしれなかった。

上では雨が激しくなった。下では埋もれた都市が、登録されていない義務を運び続けている。第三の署名が歴史からは隠されても、その帰結からは隠されていない場所へ向かって。